

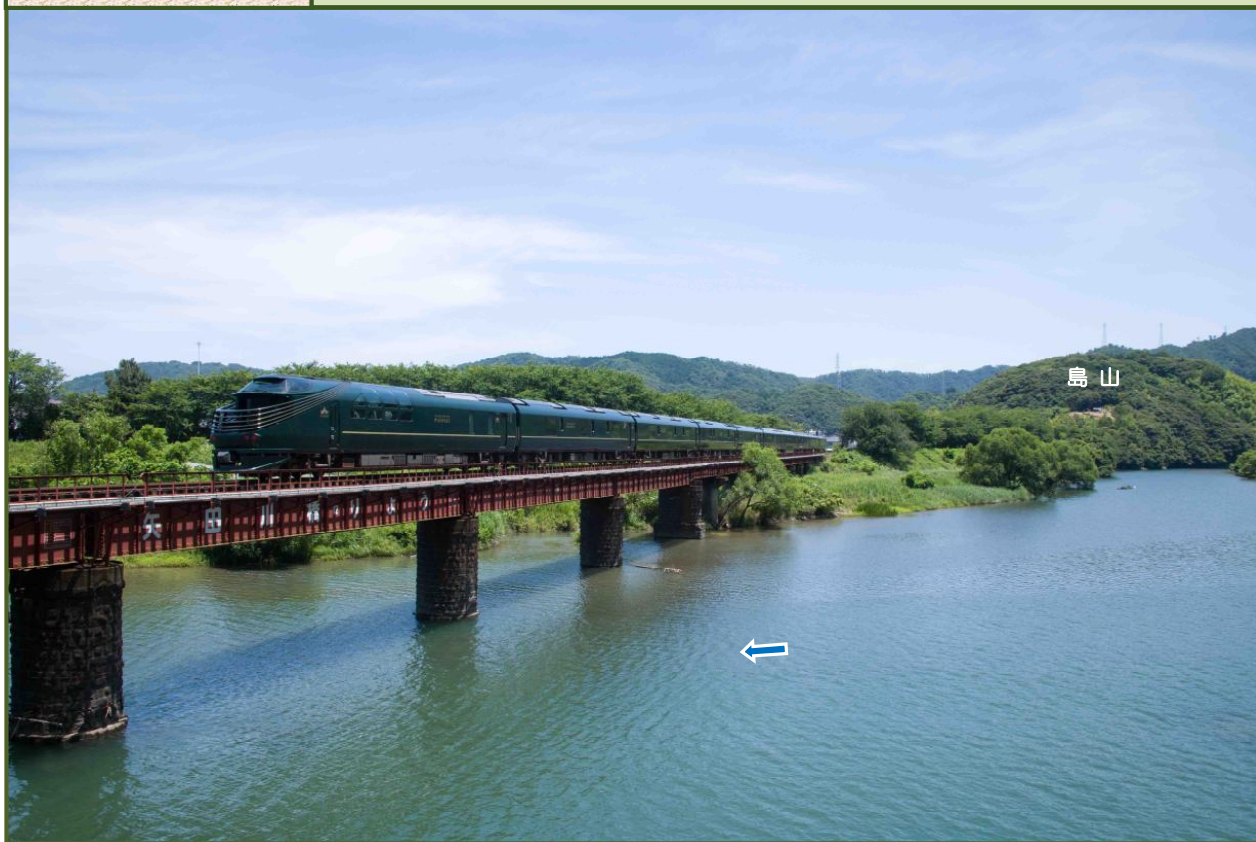


写真-1 矢田川に架かるJR山陰本線・矢田川橋梁（令和5年6月撮影）

■ JR 山陰本線・矢田川橋梁を渡る「トワイライトエクスプレス瑞風」

写真-1 は、二級河川・矢田川（やだがわ）の河口付近に架かる JR 山陰本線・矢田川橋梁と、通りがかったクルーズトレイン「トワイライトエクスプレス瑞風」を撮影したものです。

そして、右手に見える小高い山が「島山」です。この山は、かつて「志馬比山（しまひやま）」と呼ばれ、有馬皇子^{※1}（ありまのみこ）の王子・志乃武王（しのぶおう）が山上を切り開いて城砦を築いたと伝えられる山で、矢田川の旧河道である神崎川（現・香住谷川）の話が出てくる「長見寺（ちょうけんじ）伝承」に繋がっています。伝承によると、その昔、矢田川は島山の向こうを東に向いて流れていたそうです。

※1 有馬皇子：『日本書紀』では「有間皇子」と表記されている。舒明（じゅめい）天皇 12（640）年、後の孝徳天皇の皇子として誕生。母は左大臣・阿倍内麻呂の娘・小足媛（おたらひめ）。名は父が皇子時代に有間温湯（有馬温泉）で療養中に生まれたからという。

皇極天皇 4（645）年 6 月 14 日に即位した孝徳天皇は、大化元（646）年 12 月 9 日に都を難波宮に移したが、それに反対する皇太子の中大兄皇子（後の天智天皇）は白雉（はくち）4（653）年に都を倭京（飛鳥京）に戻すことを求めた。孝徳天皇がこれを聞き入れなかったため中大兄皇子は勝手に飛鳥京に移り、皇族たちや群臣たちのほとんど、そして皇后である間人皇女（はしひとのひめみこ）までもが中大兄皇子に従って飛鳥京に戻ってしまった。失意の中、孝徳天皇は白雉 5（654）年 10 月 10 日に崩御した。このため、斉明天皇元（655）年 1 月 3 日、孝徳天皇の姉の宝皇女（たからのひめみこ：皇極天皇）が再び斉明天皇として重祚（ちょうそ：退位した天皇が再び天皇の位を継承すること）した。父の死後、有間皇子は政争に巻き込まれるのを避けるために心の病を装い、療養と称して牟婁（むろ）の湯（白浜温泉）に赴いた。飛鳥京に帰った後に病気が完治したことを斉明天皇に伝え、その土地の素晴らしさを話して聞かせたため、斉明天皇は紀の湯（白浜温泉）に行幸した。飛鳥京に残っていた有間皇子に蘇我赤兄（そがのあかえ：馬子の孫）が近づき、斉明天皇や中大兄皇子の失政を指摘し、自分は有間皇子の味方であると告げた。有間皇子は喜び、斉明天皇と中大兄皇子を打倒するという自らの意思を明らかにした。ところが、蘇我赤兄が中大兄皇子に密告したため謀反が露見（蘇我赤兄が有間皇子に近づいたのは、中大兄皇子の謀略と考えられている）、有間皇子は捕らえられ、斉明天皇 4（658）年 11 月 11 日に藤原（ふじら）坂で絞首刑に処せられた。享年 19。

今回は、以下の資料を中心にできる範囲で読み解きながら、矢田川河道の変遷についてまとめてみようと思います。

- ① 『兵庫県文化財調査報告第 315 冊～長見寺廃寺址』(兵庫県教育委員会・2007 年 3 月、以下「調査報告」という)
国道 178 号香住道路ランプ部道路改築事業に伴う発掘調査結果をまとめた報告書。
- ② 「昔の香住絵図」
江戸時代天保年間(1830～1843)の人物が昔の香住について聴き取り作成したものの写し。
- ③ 「江戸期の但馬・丹後海岸絵図～美含(みくみ)郡香住浦図」
平成 22(2010)年 6 月に出石史料館の簡易燻蒸(くんじょう)を実施した際に、土蔵奥の戸棚の木箱から発見された古文書(地図類)で、江戸時代後期から幕末にかけて但馬・丹後の「海岸部」に特化して作成された絵図。

■ 「調査報告」に記載の「長見寺伝承」に見る矢田川の付け替え

当地には、かつて香住の地を支配していた篠部（しのべ）氏の菩提寺である長見寺にまつわる伝承があります。これによると、香住平野における矢田川の流れは人工的に付け替えられたもので、以前は香住区森の北西部から北東方向に流れを変え、姫路山と島山の間をとおり、平野北側の砂堆※²（さたい）の南縁に沿うように流れ、平野東側の香住区境で海に注いでいましたが、天慶（てんきやう）年間（938～947）に油良と七日市の間にある「蟹狭間（かにさま）」（狭間：山と山の間の狭く低い所）を人工的に切り開いて、現在の川筋が形成されたと言われています。

上記の言い伝えについて、『但馬の城』に掲載されたものを多少加工して引用します。

孝徳天皇第一宮有馬皇子は謀反により紀州藤白坂で討たれたと『日本書紀』には記されているが、実はその従者が身代わりに立ち、また追討に向かった者の好意によって、ひそかに丹波に遁(のが)れ、のち、船に乗って香住の地に着き、志馬比山周辺を隠棲の地と定め、海部の比佐を娶(め)とり、王子・志乃武王を授かった。

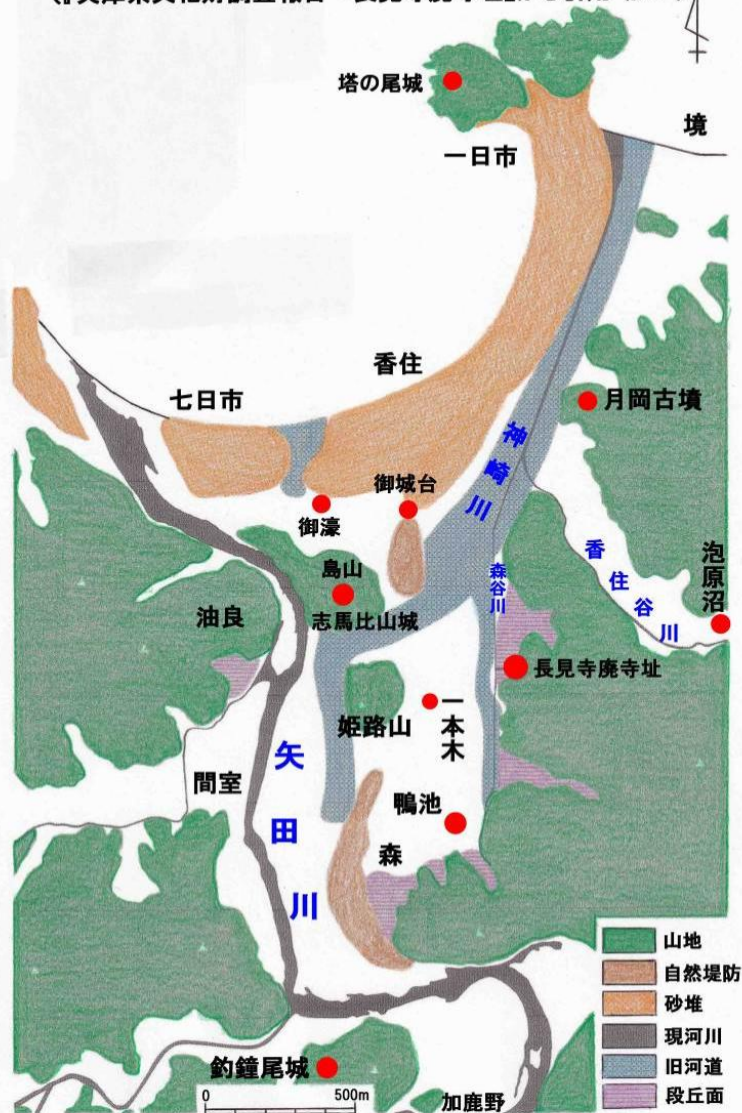
志乃武主は出石小坂の女を迎え、志馬比山の山上を切り開いて城砦を築き付近を領有された。その後、有馬皇子が薨去(こうきょ)されたので、入江大向うの岡の上に葬り奉った。これが月岡古墳であるといわれている。

さて、この志乃武王の子孫、志乃武有徳はその姓を篠部(しのべ)と改め、その邸宅を山頂から山麓東方の台地に移し、対岸の矢谷に川港を設け、壮麗な菩提寺・長見寺を建立した。

山上には金比羅大権現の社を置くなど、領地内の要害の地とするが、何分その間に神崎川が流れていて交通などに大きな不便(防御のために必要では?)があったので、延喜 12 (912) 年その対策として、河川改修ならびに耕地拡張の大工事に着手、29 年後の天慶 3 (940) 年に完成した。

河川改修では、それまで一日市(ひといち)の東浜に流れ込んでいた神崎川を、志馬比山の西側を開削して七日市の西側に付け替えた。

図-1 香住平野の地形分類に伝承関連地を重ねた図
(『兵庫県文化財調査報告～長見寺廃寺址』から引用・加工)



この工事によって今まで河川敷となっていた土地はもちろん、一日市の柳池、七日市の御濠池（おほりいけ）、香住の泡原沼（あわらぬま）、森の鴨池などの低湿地は全部埋め立てられて、ここに 70 町歩の新しい耕地が出現した。しかも、これらの耕地の大部分は区画が井字形に整然と区切られている。さらに、この耕地全体の見通しがきく地点に、その時代の地積計量制度である 360 歩 1 反の単位、小 260 歩の区画を置いて頑丈な石畳で固め、面積丈量の基準台とし、その中央にはそのとき用いた丈量縄を埋め、その上に記念樹として楠を植えている（現在も「一本木」という字名が遺存）。

なお、四隅には大石を置いて、この頂点と、洪水時に備えるために志馬比山・姫路山間に築いた堤防の頂点の水準が一致するようにねらい、将来において対岸の村落に被害が及ばないように配慮されている。

このようにして、有馬皇子在世以来実に 500 年間徳政を敷き、領民から敬われていた篠部氏もやがて滅ぶ時がきます。

延元元（1336）年に至り、その子孫の篠部有信が祖先の法要を営むため長見寺に参詣した時、かねてから領地のことで不和だった長井庄釣鐘尾城主・野石源太が、この時とばかりに予め示し合わせてあった塔の尾城（城主・長太郎左衛門）に鐘で合図し、ひと手は長見寺、ひと手は留守館へと攻め寄せた。

この不意打ちに驚いた篠部方は必死に敵を防いだが、特に充分な戦備も整えておらず、かつ寺に火を放たれたので、もはやこれまでと主従自刃して火中に身を投げ非業の最期を遂げた。

一方留守館でも奮戦大いに努めたが、寺に火がかかったのを見て形勢の不利を知り、館に火をかけ一族の北村七郎は息子を、日下部新九郎は息女を伴って脱出した。息女は南の山麓で敵の矢に当たり倒れ、息子もまた乱戦の間に行方不明となって、さすがの名門もついにその跡を絶ったのである。（以下略）

この「長見寺伝承」に出てくる「篠部氏有馬皇子の末裔」というのは、おそらく篠部氏が自らの出自を権威付けするための創作と思われますが、篠部有徳が行ったとされる神崎川（現・矢田川）の付け替えは、十分に史実であり得ると思います。

写真-3 は、昭和 41（1966）年 9 月、香住神社本堂（写真-2）の裏手に個人の手で建てられた「有馬皇子夫婦塚」碑です。

香住に残る記録では、本物に対する遠慮なのか、もっぱら「有間皇子」ではなく「有馬皇子」となっています。

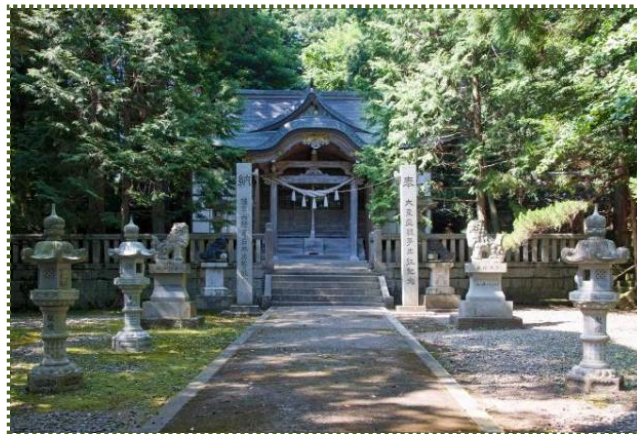


写真-2 香住神社本堂



写真-3 「有馬皇子夫婦塚」

※2 砂堆：波浪や沿岸流によって運ばれた砂礫が堆積してできた地形。

■ 「香住絵図」について

図-2 の「昔の香住絵図」（以下「香住絵図」という）は、江戸時代天保年間（1830～1844）の人物が昔の香住について聞き取り作成したものの写しですが、いつの時代を描いたのかは不明です。つまり、この絵が必ずしも天保年間の香住を描いたものとはいえないということです。この点については、「香住浦図」と対比しながら詳述します。

「調査報告」によると、長見寺廃寺址の西側の低湿地部の微地形を復元すると、図-2 の絵図と同様に姫路山と島山（志馬比山）の間に旧河道を復元することができることから、現在の矢田川は以前とは大きくその流れを変えていることは間違いないようです。また、この流れによって形成されたと考えられる自然堤防が香住区森の集落に認められています（ただ、その時期を特定することは、現在のところ困難）。

また、「香住絵図」に描かれている「御城台」については、当該地に微高地が存在し、その呼称からもこの微高地が「御城台」に相当するものと考えられます。その他、「鴨池」と「御濠池」についても、微地形分析で微凹地に相当する箇所にあたります。

以上のことから、「長見寺伝承」は、その中に多くの史実が含まれていると考えられますが、加えて「香住絵図」とも多くの一致点が認められます。

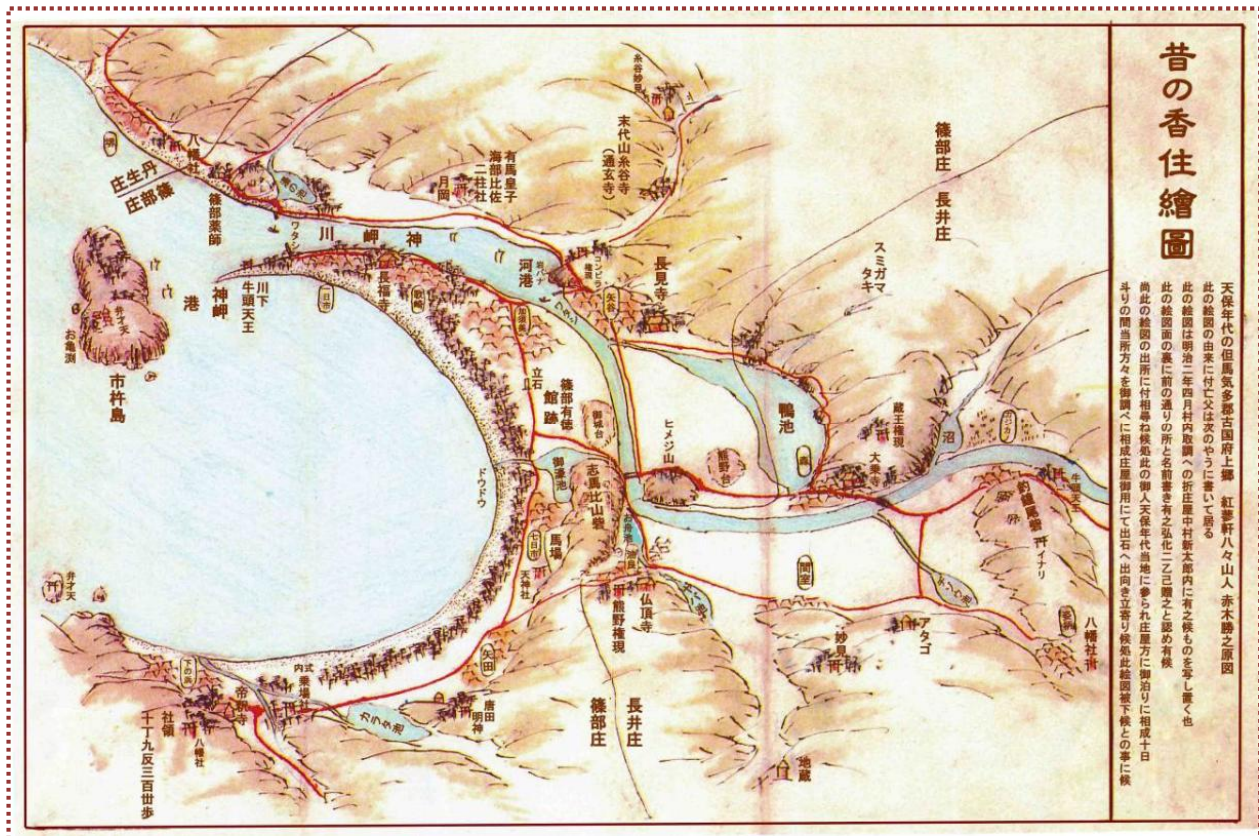


図-2 「香住絵図」

なお、図-2 の右端の脚注は以下のとおりです。

天保年代の但馬氣多郡古国府上郷 紅夢軒八々山人 赤木勝之原図

此の絵図の由来に付亡父は次のやうに書いて居る

此の絵図は明治二年四月村内取調への折庄屋中村新太郎内に有之候ものを写し置く也

此の絵図面の裏に前の通りの所と名前書き有之弘化二乙己贈之と認め有候

尚此の絵図の出所に付相尋ね候處此の御人天保年代当地に参られ庄屋方に御泊りに相成十日斗りの間当所方々を御調べに相成庄屋御用にて出石へ出向き立寄り候處此絵図被下候との事に候

上記脚注について筆者は十分な解釈はできませんが、恐らく天保年代に香住に来られた方が、方々をお調べになって描かれたもののようです。つまり、当時の香住の状況を描いたものではなく、地元の人々に昔の香住の状況を聴き取りして描いたものと思われます。では地元の方が語った「昔の香住」というのは何かというと、「長見寺伝承」を指しているのではないのでしょうか。

■ 「香住浦図」について

図-3 の絵図は、平成 22 (2010) 年に出石史料館において発見された江戸後期から幕末にかけての但馬・丹後地方の海岸部に特化して作成された絵図の一部で、「美含(みくみ)郡香住浦図」(以下「香住浦図」という)です。

絵図の作成年は、描かれている範囲と、村名に付された記号の区分(領主区分)から推定して、仙石家出石藩が丹後に領地を有していた宝暦 13 (1763) 年~天保 6 (1835) 年の間で、さらには竹野郡の三津村(現・京都府京丹後市)が宮津藩領(本庄氏)であった文政 11 (1828) 年以前とされています。

つまり、宝暦 13 (1763) 年~文政 11 (1828) 年の間に作成されたということです。

江戸時代後期の香住浦を描いたとされる図-3の絵図を見ると、矢田川は概ね現在の流路を流れており、砂堆の先端にある市杵島は陸と繋がって陸繋島になっています。陸繋島近くの砂堆上にはすでに多くの人家が建っており、陸繋島になってかなりの年月が経過しているものと推察されます。

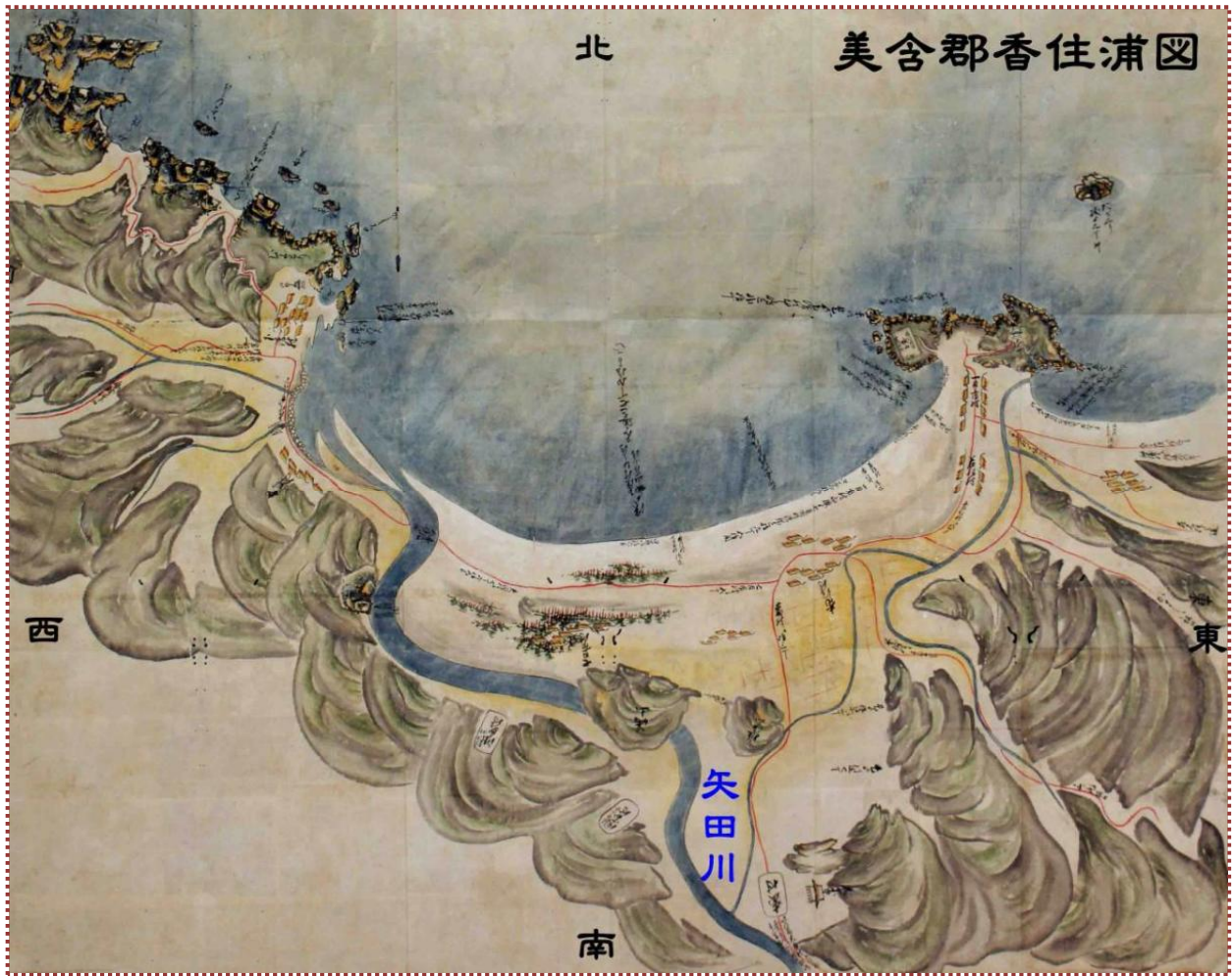


図-3 「美含郡香住浦図」(出石史料館「美含郡香住浦図」から引用・加工)

一方図-2の絵図では、砂堆の先端にある市杵島(いつきしま: 現・岡見公園)は陸に繋がっていないくてまだ島です。加えて、「香住絵図」に描かれている鴨池も「香住浦図」では埋め立てられています。なので、「香住絵図」に描かれているのは、江戸時代後期よりかなり古い時代の香住と考えられます。

そう考えると、「香住絵図」は「800年以上前に有馬皇子の子孫が大規模な河川の付け替え工事を行う」前の状況を、「長見寺伝承」を基に描いたものと考えるのが自然かもしれません。

■ 矢田川の流路の変遷についての総括

以上のことから、矢田川の流路の変遷について以下のことが言えると思います。

① 「香住絵図」(図-2)において、神崎川(現・矢田川)は現在の香住谷川の流路を流れていること、および「調査報告」によると、微地形分析から、「香住絵図」と同様に姫路山と島山の間に旧河道を復元することができることなどから、現在の矢田川は以前とは大きくその流路を変えていることは間違いない。

② 矢田川の流路の変遷(流路が北東方向から北西方向に転じたこと)は人為的なものか、それとも自然の営力によるものか。

この点については、矢田川の河口付近のさほど速くない流れによる侵食の力は弱く、蟹狭間を長い年月をかけたとしてもぶち破る力はないはずで、矢田川は人為的に付け替えられたものと考えざるを得ないというのが浅学非才の筆者の見立て。因みに西隣の清富藩(現・新温泉町)では、江戸時代初期に低い山を切り割って岸田川が付け替えられている。(『ひょうご水百景』No.65 参照)

③ 付け替えられた時期はいつか、という点について、江戸時代後期に作成された「香住浦図」では、すでに現在の流路になっていることなどから、それよりかなり古い時代と考えられる。付け替え時期を示す資料は今のところ「長見寺伝承」しかないが、「調査報告」から伝承を裏付ける史実が多々認められている。当時の土木技術を考えると大変な難工事であったと思われるが、蟹狭間を開削して神崎川を付け替え、その掘削土で旧河道や鴨池など低湿地を埋め立てて耕作地にするという、浸水対策と農地拡張の一石二鳥が天慶3(940)年に人為的に成し遂げられたと考えるのが理解を得やすいと思われます。

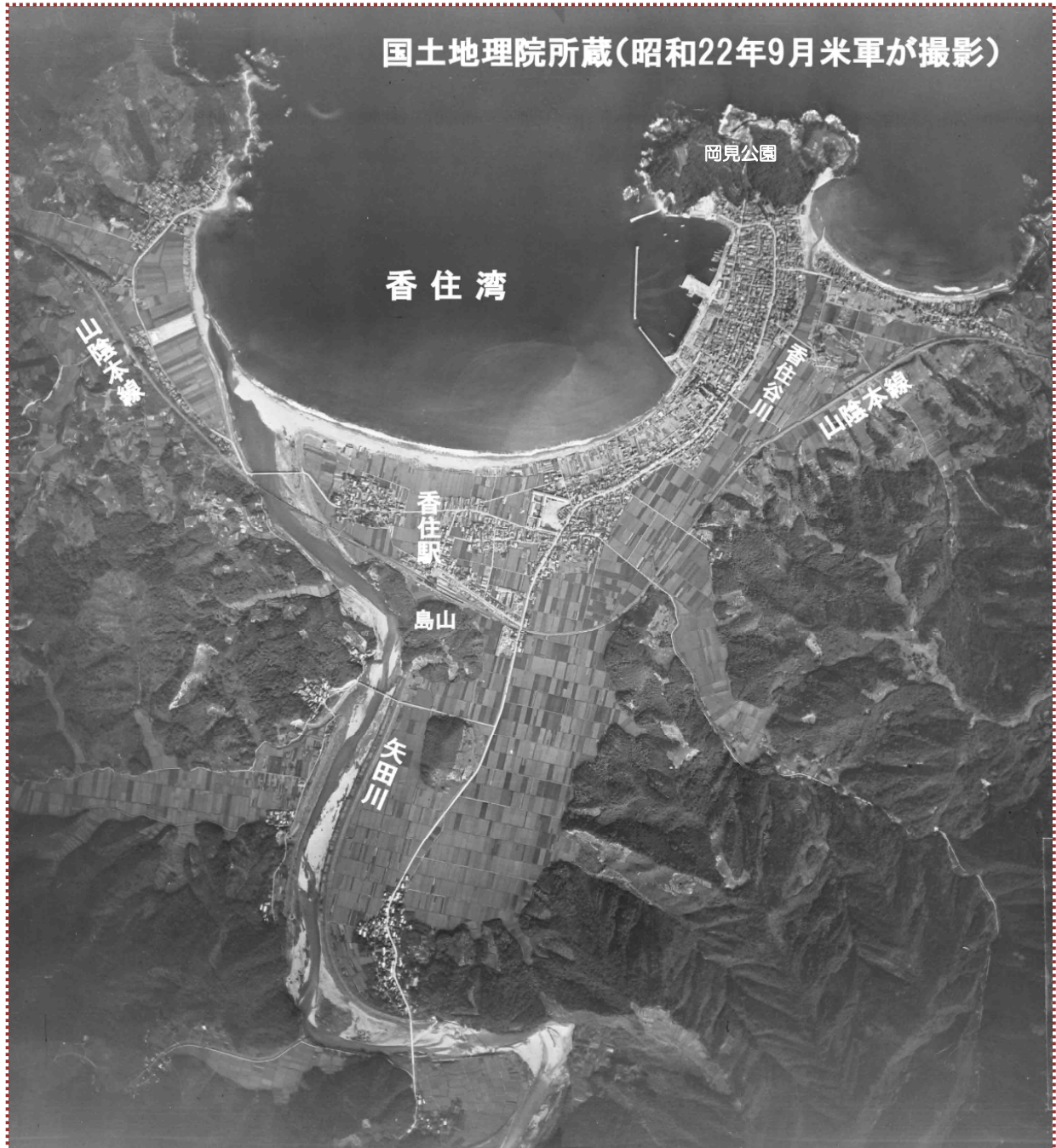


写真-4 香住湾周辺の空中写真

■ モノローグ

今回の矢田川河道の変遷に関して、香美町教育委員会の石松崇氏には「香住絵図」の解説や「香住浦図」のデータ提供、そして数多くの疑問に対するご教示などご多忙の中大変お世話になりました。感謝！！

香住湾の東端にある陸繋島（市杵島）には、香住海岸の展望スポットとしても有名な岡見公園があり、ユウスゲ群生地があります。山頂には右のような説明板が立っています。

筆者は、ユウスゲの花を撮るために令和8（2026）年7月中旬に岡見公園を訪れました。16 時頃から開花するということでしたが、間違って早く咲く花もあるはず、ということで岡見公園に 15 時過ぎに到着。早速探し回った結果、3 輪ほどが開花していたので、それを集中的に撮って、15 時半頃帰路につきました。家に着いたのは 18 時半頃でした。

岡見公園

この公園は昔、離島であったと伝えられている。矢田川と香住谷川が吐き出した土砂を北西の風が運び、陸地につなぎとめたのだという。西側の城山の頂点は「塔の尾城（1336～1580）」の跡であるが、現在は荒地となり、香住港の灯台がある。（以下略）

ユウスゲ

ワスレグサ科ワスレグサ属に分類される多年草の 1 種。和名は花が夕方に開き翌日の午前中にしぼみ、葉がスゲに似ていることに由来する。別名キスゲ。山地の草原や林縁などのやや乾いた場所に生育する。茎の高さは 100～150 cm。根生葉は線形で、長さ 40～50 cm、幅 5～15 cm、2 列に出て扇状に開き上部だけわずかに下垂する。1 本の茎の先端が枝分かれして、レモン色したラッパ状の花を上向きに次々と咲かせる。花弁は 6 つに深く裂け、やや芳香がある。花期は 7～9 月。美方郡香美町では町花に指定されていて、岡見公園には群生地がある。



写真-5 ユウスゲの群生地、あと1時間もすれば開花するはず



写真-6 岡見公園に咲いていたユウスゲ（令和8年7月）

ついでなので、岡見公園周辺の香住海岸や香住漁港の風景を紹介します。



写真-7 矢田川河口から写真中央の陸繋島（市杵島）を撮影



写真-8 岡見公園に立つ灯籠、その右は白石島

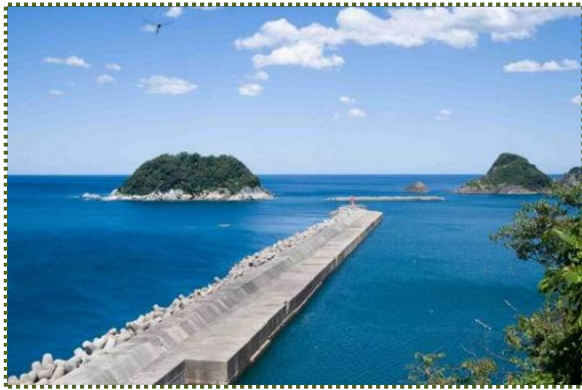


写真-9 西防波堤の左が白石島、右が黒石島



写真-10 香住漁港（東港）

【参考資料】

- 1 『香住町誌』 香住町教育委員会 昭和 55 年 11 月
- 2 『兵庫県文化財調査報告第 315 冊～長見寺廃寺址』 兵庫県教育委員会 平成 19 年 3 月
- 3 『文教府資料第 70 号～但馬の城』 但馬の城編集委員会 昭和 50 年 3 月
- 4 『郷土の城ものがたり（但馬編）』 （財）兵庫県学校厚生会 昭和 47 年 11 月
- 5 『香住の地誌（2）』 香住町教育委員会 平成 9 年 12 月
- 6 『有間皇子』 朝日本歴史人物事典
- 7 『砂堆』 デジタル大辞泉（小学館）
- 8 『江戸期の但馬・丹後海岸絵図～美含郡香住浦図』 豊岡市教育委員会
- 9 『有間皇子、重祚、ユウスゲ』 フリー百科事典『ウィキペディア（Wikipedia）』

※発行：令和 5（2023）年 12 月 『ひょうご水百景』 No.187

改訂：令和 8（2026）年 6 月 『ひょうご水百景』 No.187

改訂：令和 8（2026）年 7 月 『ひょうご水百景』 No.187